探元畫集

414
45

始

帝國圖書館藏

探元畫集

大正
15.12.23
内交

414-45

木村探元

大武法橋探元齋木村守廣は薩摩島津侯の家臣にして、武を勵む傍ら繪事を好み、同藩の狩野派畫家小濱常慶に學ぶ。二十歳の頃早くも一かどの畫手となり、二十五歳の春(元祿十六年)太守の許を得て始めて江戸に到り、狩野探信の門に入り探幽の畫法を研究し、且つ宋元明の古名畫の粉本を摸寫し、二十七歳の秋歸國し、二十九歳にして太守の命に依り剃髮して名を探元と改め、畫を以て出仕す。壯年に及んで雪舟に私淑し、大に修得するところあり、四十八歳の時藩主夫人に扈從して京都に入り留ること月餘にして歸藩し、更に享保十九年五十六歳の時、近衞關白の召に依り京都に上り、十月より翌年四月末迄京都に留る。其の間近衞公の命を承けて畫を納め、又禁裏院御所御襖及御衝立の繪を描きて獻上し、且つ公卿其他朝野の貴紳より盛んに揮毫を求められて寸隙無き傍ら縉紳の邸に藏せらる、宋元明の名畫を臨摹し且つ東山時代の名蹟を探究す。法橋に敍せられ次で大武の稱號を賜はりたるは此時に在りき。同年五月歸國して以來再び出遊せず、専ら甕府に在りて書畫及び詩歌俳茶に身を委ね、明和四年二月八十九歳の高齡を以て逝けり。 又探元は單に繪畫のみならず、書に巧にして正に堂に入りたるものあり、自ら謂ふ世人何を以て余を畫家と稱して書家と稱せざるやと、且つ詩歌を善くし、武道にも熟達せりと云ふ、平生禪學を好みたるにより、書も亦禪味を帶ぶるもの少からず、趣味極めて廣汎にして、雅號の多きこと十五六に及ぶ。 卽ち時員と號したるは十七歳の頃にして、二十一歳の時より守廣と號し、二十九歳の時太守より探元の名を賜ひ爾來終生之を用ひたり、六十二歳の時隱居を許されて靜隱と稱し、六十四五歳の頃より細篁廬靜隱叟と號す、八十歳の時屋後に三曉庵と稱する庵室を營み、世塵を避けたりと雖猶能く健筆を揮ひ、其の意に適したるものには三曉庵靜隱の號を記せり、此外黔巖木郁々子、黃瑞居士、懷雲、淨德堂法淨、斗山玄風、梅下隱叟、李嶠、虛中、暖茶翁、鱗照、曉山、淸山古人等甚だ多く、落款亦凡そ六十餘種を數ふるに至る、其の人格識見、尋常の畫家にあらずして、英邁なる氣魄自ら書畫に現る、ものあり。

探元の畫を成すや好みて漆黑の焦墨を用ひ、良質強靭なる紙を擇べり、蓋し千載の後尙其の筆痕墨氣をして、古色の爲めに銷せざらしめんとの用意に出でしものにして、彼の近史の好みて作る所の如き、淡墨輕淸百年を出でずして殆んど將に覩るべからざらんとする巧黠輕薄なるものに比すれば、其の畫信に彭殤も啻ならず、此の焦墨の爲め畫品の稍下るが如き嫌あるを忌まずして、寧ろ其の性格と修養とを想はざるべからず、彼の狩野芳崖が壯時島津公の聘に依り鹿兒島に至り、始めて親しく探元の遺蹟に接するの機會を得て、甕城に藏せらる、多數の探元の畫蹟を數年に亘り索訪し、悉く其の妙諦を窺ひ得て、筆力大に優越するに至れり、

而して其の紙と墨とに最も心を用ふるに至りしものは、探元が紙と墨とに重きを置きたりしことを會得したるに因るものなり、尋で橋本雅邦も亦之を傳へ知り、遙に甕城を訪ふて留ること半年、是亦大に探元の筆力、人格及び畫家として修養すべき要訣を知り得て、歸來雅邦の畫風に大なる變化、著しき妙處を發揮するところあり、遂に明治時代に於ける本邦畫壇の巨擘と稱せらるゝに至れり、現今芳崖紙及び雅邦紙と稱するものあるは、皆之を探元に因り工夫し得たるものなりとす。

抑も探元は我邦に於ける稀世の大畫人なりしに、何故に久しき間世人の注意を惹かざりしかと云ふに、夫れには凡そ左の如き原因ありしによれり、卽ち探元は壯時江戶に學びたること前後幾に二年、又京洛に上りしこと二囘を通じて半歳に過ぎず、其の餘の一生八十有餘年間は薩南に僻處したると、且つ薩隅の間に於ては其の畫蹟非常に貴重せられたりし結果、之を國境外に流出せしむることを嫌ひ、極めて祕藏したりしに依り、明治舉代に至る迄、薩隅地方以外には殆んど其の書を睹ること稀なりしが故に、實力に比して名聲の畫壇に嘖々たらざりしこと、是れ其の第一の原因なり。 次で明治十年の戰役に際し、島津家の寶庫を始め甕城內の各所兵燹に罹りし爲め、探元の遺作も亦燒失せしもの少からず、偶〻殘存せるものは益〻之を貴重して保有せられ、同鄕人の間に賣買讓與せらるゝこと有るも、他國人の手に移るものは甚だ稀少なりし事、是れ其の第二の原因なり。 更に同國出身の朝野に於ける有力者は、爾來多くは居を東京に移すと共に、探元の遺作も亦伴ふて都會に運ばれ、時に都人鑒賞家の眼に觸るゝ事ありと雖、多くは第一の原因に由來して、其の畫名すら知らざるもの多く、又書畫骨董商の手に委せらるゝことも甚だ稀にして、獨り甕城出身者にのみ貴重せられて、自餘の人には概ね閑却せられ、隨て其の價値の如きも實力に比して甚だ低く過せられつゝ、經過したりし爲め、中には一部具眼者の鍾愛するものありと雖、一般鑒賞家の間には深く愛重せらるゝに至らざりしこと、是れ其の原因の三なり。 余輩の如き數十年來、美術鑒賞界の業務に干與する者すら、夙に探元の盛名を聞くところ有りしも、其の畫蹟に接したるは大正の始にして、爾後數〻其の名蹟を見るに、筆力の雄勁にして深刻なること探幽を凌ぐものあり、氣格淸遠にして筆底神工を藏するところ雪舟の壘を摩するものあるに驚嘆して、始めて諸家の收藏に就き、索訪研究するに至れるものなり。

余輩此の如く探元の大畫人なることを知ると共に、遍く之を天下に知らしめ、以て鑒賞家の心神を樂しましめ、併せて藝術に心を寄する人士をして、大に裨益するところあらしめんと欲し、數年前其遺作を蒐集して、展觀に供し且つ畫集を發行するところあらんと欲したることありしも、時恰も東都大震火災の厄ありしに會し、遲引して今日に及びたりしが、機運熟して此こに探元歿後百六十年の秋に當り、牧野伸顯伯、金子堅太郞子、平山成信男及び團琢磨君、福原鐐次郞君、正木直彥君の發企に依り、愛藏家及び特志家の多大なる翼賛を得て、其の遺作展覽會を開催せられたりしが、開催に際して其の書蹟は之を次回の企てに讓ることゝして、唯纔に一二の資料を參考として出陳し、主として繪畫を展觀に供することゝなし、余輩が多年調査せし諸家の收藏に就き、更に比較對照の上、探元の技術の幅員の廣きを知らんが爲め、類品は數點中より其の一を擇び、眞、行、草、破墨の山水より花鳥、人物に亘り、或は紙本に絹本に、或は水墨、淡彩、濃設色等各その代表すべき傑作を出品することゝなし、且つ遠く鹿兒島より探元の遠裔木村氏の遺襲に係る探元自畫像の出陳を乞ふと同時に、同地諸家の珍藏に係る遺作數點を、代表者に依りて特に携同して出品せられ、合せて五十有餘點を展觀に供し、以て探元の卓絶せる實力の全豹を窺ひ知るの機會を得たり。 開會に際し朝野の名士、鑒賞家、藝術家の來會せるもの常に堂に滿ち、舉て探元の實力の偉大にして、稀世の名手たるに驚嘆讃美せざるはなかりき、卽ち余輩の企圖せし目的の一半は之を達成し得たるが如しと雖、展觀の期間甚だ少く、是等精選せられたる名品傑作をして、再び一堂の下に蒐集展觀することの容易ならざるを思ひ、此こに出品全部を收錄して、探元畫集を發刊するに至れる所以なり。

大正十五年十月

審美書院

主幹 窪田寒綠 編

探元畫集

目次

探元自畫像	一頁
山水圖	一頁
高然暉山水圖	一頁
高然暉山水圖	一頁
高然暉山水圖	一頁
眞山水圖	一頁
春景山水圖	一頁
破墨山水圖	
破墨山水圖	一頁
養老瀧圖	一頁
布袋馬上觀月圖	
瀟湘八景圖	一頁
富士山圖	一頁
竹林山水圖	一頁
龍圖	一頁
猛虎渡河之圖	一頁

柳陰野馬圖　一頁
柳陰臥牛圖　一頁
梅鶴圖　一頁
梅花白鵰圖　一頁
老松白鷹圖　一頁
櫻花山鷄圖　一頁
風雨脩竹圖　一頁
雪柳八哥鳥圖　一頁
雪松圖　一頁
枯木八哥鳥圖
蓮花圖　一頁
蘆雁圖　一頁
壽星及旭日飛鶴　月下猿猴圖　三幅對　三頁
老子及徑山育王山圖　三幅對　三頁
老子及梅竹雀　雪中鷺圖　三幅對　二頁
壽星圖　一頁
壽星圖　一頁
寒山拾得圖　一頁
寒山拾得圖　一頁
孔子圖　一頁
布袋雨中渡橋之圖　一頁
蜆子和尚圖　一頁
柳陰馬乗鍾馗圖　一頁
五祖圖　一頁
高砂圖　一頁
柿本人麿像　一頁
佐野之渡圖　一頁
唐兒遊戲圖　一頁
夏冬山水圖屏風一雙　二頁
老松圖屏風一雙　二頁
島津義弘公朝鮮征伐圖屏風一雙　二頁
八詠亭八景畵巻　一頁

附録

甕城名畵譜　二頁

探元自畫像

絹本　淡彩　縱二尺七寸九分　濶一尺二寸一分

木村正藏君藏

自畫像は探元四十二歳の筆に成る、題賛は清人徐葆光の加へたるものなり、徐葆光は清國江南縣の人にして翰林院の編修官たり、冊封副使として享保四年六月琉球に渡來し、歸國の途鹿府を過ぎりし時、探元と相知り辭を題したるものなりといふ、澹泊寧靜、幽居情を寄せ、筆墨自怡み、外に營む所なし、禪性日に瑩くといふに依りても、探元の性格を想像するに足るべし、木村氏傳來の重寶に係り、大正十五年十月東都に於て探元遺作展覽會の開催せらるゝに當り、特に鹿府より寄せて出陳せられたるものにして、其の裝潢に用ひられたる緞子は、探元が享保二十年禁廷の御屛風及び衝立の繪獻上に付、御褒美として下賜せられたる物なりと云ふ。

法淨居士揆元姓
平早通物理馳譽
丹青澹泊寧靜幽
居寄情筆墨自怡
外無所營年近知
命禪性日瑩誰歟
婉美輞川右丞我
思其人如在蓬瀛
康熙庚子十月題於燕邸 徐葆光

山水圖

絹本　水墨　縱五尺七寸三分　濶三尺二寸三分

公爵島津忠承君藏

此畫展じ來れば、恰も宋元名工の筆に成れるものなるかを思はしむるものあり、深山の墨氣皴擦は彼の夏珪の如く、樹姿點體は正に馬遠に似たるものあり、其の高雅清潤なること、我日本畫家の山水畫中、超絕したるところの名品なり、蓋し探元山水遺蹟中最も傑出したるものならんか。

高然暉山水圖

紙本　水墨　縦三尺九寸五分　濶二尺

堀　達君藏

探元好んで高然暉の山水を描く、壯時より晩年に通じて能く之を筆にせり、随て其の類品も亦少しとせず、就中此こに收載したる三圖最も優逸したるものなりとす、殊に第一圖の如きは晩年の傑作にして、靜隠獨特の素紙に得意の焦墨を用ひて、縦横自在に其の靈腕を揮灑したるところ、最も鑒賞するに値すべきものなり。

高然暉山水圖

紙本　水墨　縱四尺八寸　濶二尺九寸

山田直矢君藏

構圖深遠にして布局整齊、頗に咫尺千里の慨あり、探元知命前後に於ける一大傑作なり。

高然暉山水圖

紙本　水墨　縦三尺八寸五分　濶一尺七寸八分

伯爵牧野伸顯君藏

本圖も亦晩年の佳作にして、構圖の優秀なること三圖中第一に閥すべきものなりとす。

眞山水圖

紙本　水墨　縦三尺五寸　濶一尺六寸

川上直之助君藏

春景山水圖

絹本　淡彩　縦三尺四寸五分　濶九寸五分

倉知誠夫君藏

狩野派の畫手多く此種の山水圖を畫く、蓋し雪舟の意を酌むに出づ、守景の如き特に好んで之に倣ふ、而も情趣恬淡にして之を陶冶するに至らず、探元獨り能く之を治し得て、探元の等揚山水たらしめ了れるを見る、卽ち探元老熟の佳作、小品山水中優逸せるものの一なり。

破墨山水圖

紙本　水墨　縦二尺八寸九分　濶九寸六分

田中善吉君藏

探元壯時描く所に係り、探幽の筆意に倣ふものに似たり。

破墨山水圖

絹本　水墨　縦三尺四分　濶一尺二寸四分

井上辰九郎君藏

破墨の筆致を以て雪景山水を描きたるもの、是亦晩年の遺作にして、殆んど梁楷を見るが如き感あり。

養老瀧圖

紙本　水墨　縦三尺八寸八分　濶一尺二寸六分

川上直之助君藏

養老の瀧を寫すに當り、特に其の水を以て描きしこと傍記するところの如し、探元の用意の篤き、趣味の深きこと、此の一事を以て推知すべく、氣韻の高き所以亦此こに存す。

布袋馬上觀月圖

紙本　水墨　縦四尺　濶八寸五分

伯爵牧野伸顯君藏

馬背載する所の一大破笠、這中何物をか蔽ふ、破隙纔に半面と隻手とを覗ひ、馬上の布袋雨後の月明を賞する圖たることを知る、何等の奇想ぞ、落筆も亦輕妙にして洒脱、松花堂と雖此こに到ること能はじ、落款に花押有るは、探元遺蹟中珍とするところなり。

瀟湘八景圖

絹本　淡彩　縦二尺六寸　横四尺七寸

公爵島津忠承君藏

本圖は藩公の命に依りて畫きたるものなりと傳ふ、故に款識無しと雖、探元六十歳前後に於ける一大傑作たることは疑を容れざるところなりとす、他に此圖と殆んど同似の紙本八景圖を收藏せるものあるを見るに、幅員稍大にして、中景漁村夕照の一部畫趣を異にせるのみ、自餘の布局皆同一にして且つ落款を記せり。

富士山圖

紙本　水墨　縱三尺　濶五尺四寸

川上直之助君藏

此圖探元壯年時代の作にして雪舟の圖より臨摹したるものなり。

竹林山水圖

紙本　水墨　縱一尺九寸八分　濶三尺九寸

堀　達君藏

探元特に細篁を愛す、其の別墅多く之を植ゆ、時に畫に描き又詩歌に詠ず、雅號の因るところ亦此こに出づ、而して之を檢芝瑞の畫竹に擬せしといふ、風韻の存する故なきにあらざるなり。

竹林山水圖

龍圖

紙本　水墨　縱三尺四寸八分　濶一尺六寸六分

大久保利武君藏

探元又能く龍虎を描く、共に猛氣の溢るゝものあり、而も龍の圖に至りては遙に探幽に優るものあり、此こに揭ぐるところのもの其の一例なりとす、陳所翁の筆意に依らずして、牧谿に倣ふものに似たり。

猛虎渡河圖

紙本　水墨　縦二尺四寸九分　濶四尺

野上堅藏君藏

探元の虎を描くや、多く寫意に出づるが故に、虎を見たるものゝ眼に映じては、甚だ奇異の感を懐くに至る、而も熟視之を久しうするに及んで、妙味大に生ずるものあり、此こに揭ぐるところのものは壯時の筆に成れり、虎子を庇護して激流を泳ぐ圖の如きは、前後未だ類例を見ざるところにして、母虎の姿勢及び其の眼睛の跡を觀て、筆者用意の尋常ならざるものあるを知るべし。

柳陰野馬圖

絹本　淡彩　縱三尺二寸二分　濶二尺一寸五分

公爵島津忠承君藏

柳陰臥牛圖

紙本　水墨　縱一尺七寸七分　濶三尺二寸五分

冲　雄熊君藏

春風吹暖、獨り吾人の長閑を弄するに委せず、野牛も亦悠々怡樂するの狀を寫す、一氣に健筆を馳せて成り、情趣眞を穿つものあり、蓋し寫意の妙諦を盡したるものとす、自ら題して曰く、綠楊芳艸春風岸、倒臥橫眠得自由と、其の畫固より妙なり、書之に伴ふて更に妙を加ふ、關防に書畫併學の印を捺し、落款に黃金難買一生閒の印を用ふ、數奇者垂涎を禁せんと欲して能はざるものなり。

梅鶴圖

紙本　淡彩　縱四尺一寸三分　濶一尺六寸五分

西郷午次郎君藏

筆致高遠にして雄健、殆んど雪舟を見るが如き感あり。

梅花白鷴圖

紙本　着色　縱五尺四寸三分　橫二尺六寸八分

堀　達君藏

探元花鳥の遺作中、此畫の如きは最も優逸せるものゝ一にして、所謂純白の探元紙に、精良なる色彩を以て、努力を盡くして揮灑したる、莊重雄渾の大傑作なりとす、其の紙幅の大なるを見れば、挂幅とすべく描きたるものにあらずして、襖の用に供せられたるものなることを推するに足れり、探元の傳記を考ふるに、探元曾て京都に上りし時、禁廷御屛風に金華鳥の圖を描きて獻納したりしに、近衞關白より特に薩陽大武法橋探元の落款を識すべきことを命せられしといふ、之に依て想ふに、歸斎の後斎公より更に記念として白鷴の圖を寫さしめ、以て城中に留められしものゝ其の一片が此圖にして、明治維新以後城中より出でゝ遂に堀氏の手に歸するに至れるものならんかと云ふ。

老松白鷹圖

紙本　着色　縦三尺九寸　濶一尺九寸

植村俊平君藏

本圖は探元七十二歳の筆に成る、雪舟に紹述し、特に勁硬の筆致を以て畫き、能く威振八荒の氣魄を現す、遺作中有數の佳品なり。

庚午春杪

櫻花山鶏圖

絹本　着色　縦四尺五分　濶一尺五寸五分

丸田彦六君藏

本圖は探元六十歳前後の作にして、花葉嫩條、巧みに倭繪の情趣を奪胎して、更に樹枝に自家の定型を存す、山鶏に至りては全く寫生の法に依り、造化も亦その巧妙を競ふこと難からんとす、亦遺作中の珍蹟なり。

風雨修竹圖

紙本　水墨　縱四尺一寸九分　橫一尺五寸一分

西脇健治君藏

梅花道人の墨竹を仰慕して、之が模倣を試みたりし畫人、日本支那を通じて少しとせず、然れども能く其の神髓を寫し得たるものあるを見ること稀なり、今此圖を見るに及んで、探元の最も能く吳鎭の眞意を捉へ來りたるものあるを認む、而して北宗より出でゝ能く此等南宗の輕倩瀟洒の筆を行る、其の手腕の自在にして、幅員の大なる以て知るに足るべし。

雪柳八哥鳥圖

紙本　水墨　縦三尺一寸　濶一尺一寸三分

侯爵　大久保利和君藏

雪柳の老幹剛勁の如くにして非なり、數條の纖枝嫋々たる如くにして筆底力餘り有り、八哥鳥に至りては我東山時代の名手と雖、能く之に優るものを寫したるを見ず、氣格淸遠、眞に尊重すべき神品なり。

雪松圖

紙本　水墨　縱四尺七分　濶九寸二分

川上直之助君藏

亭松雪を載せて毅然たるの筆致、纖に墜ちす疎に流れす一幅の小品能く森嚴の意を示すに足れり。

枯木八哥鳥圖

紙本　淡彩　縱三尺三寸五分　濶九寸五分

山田直矢君藏

八哥鳥の姿態を描きて輕快、而して自ら雄勁の力を藏するを見る、更に潤ほすに野蔦の紅を以てす、其の妙技人をして嘆賞措く能はざらしむるもの有り。

岩鷲圖

雙頭蓮花圖

絹本　着色　縱九寸　濶一尺一寸五分

加藤丑之助君藏

本圖は探元の題する如く、雙頭蓮の寫生にして、花葉の鈎勒、設色の温籍、全く錢舜擧を紹述せるものにして、その精緻眞を奪ふものあり、又其の細字の巧妙なるに徴して、探元の書の非凡なることを知るに足るべし。

蘆雁圖

紙本　水墨　縦一尺三寸　濶一尺九寸九分

伯爵牧野伸顯君藏

探元の花鳥も亦雪舟に私淑する所多きは、先きに屢逃せる如し、此圖最も能く之を轉化し、減筆の妙を極めたるものとす。

壽星及旭日飛鶴　月夜猿猴圖　三幅對

紙本　淡彩　縱各四尺五寸七分　濶各二尺二寸五分

公爵　島津忠重君藏

老子及徑山育王山圖　三幅對

絹本　淡彩　各縱四尺一寸六分　濶一尺八寸二分

公爵　島　津　忠　承　君　藏

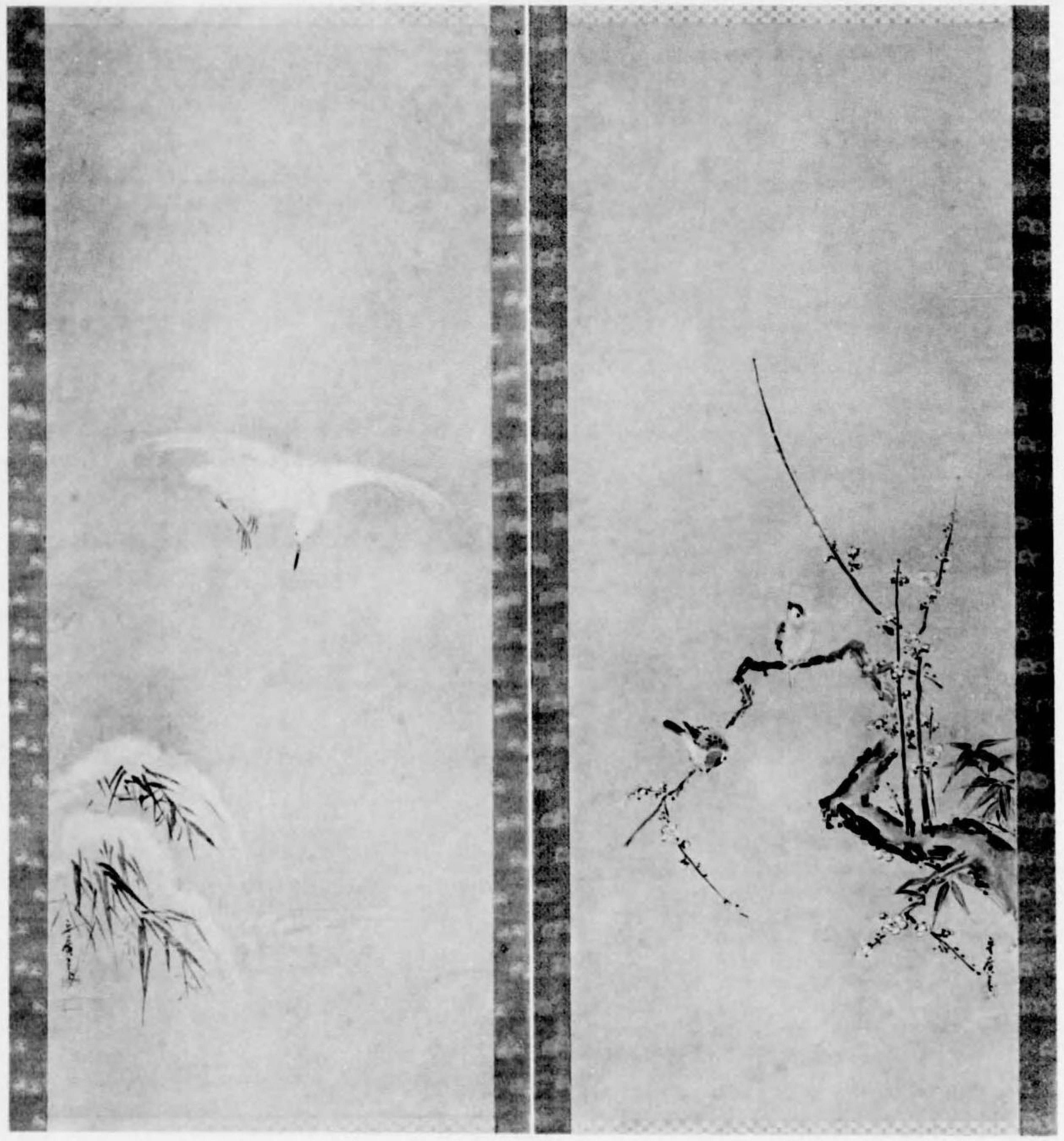
本圖は探元晩年の一傑作にして、老子の面貌奕々として神に入り、他の能く筆を著け難きところあり、衣袍の皴法亦莊重にして温籍なること探元一家の法に據る、左右徑山及び育王山の圖、共に筆意を雪舟に取りて、更に勁剛を避け豊潤を加へたるものにして、遺作中の名品なりとす。

老子及梅竹雀　雪中鷺圖　三幅對

紙本　淡彩　各縱四尺二寸三分　濶一尺七寸

川上直之助君藏

此圖探元五十歳頃の筆に係る、老子の風神奕々として人に逼り、畫中の筆端精健なること蘊蓄を見るが如く、左右の花鳥も亦瀟灑にして、探幽の眞髓を奪ふものあり。



壽星圖

紙本　淡彩　縦五尺三分　濶二尺六寸

川上直之助君藏

探元の描ける道釋人物或は剛健雪舟の如きものあり或は雄勁元信の如きものあり而して又探幽の如く深刻なるものあり此圖の如きは此の三者を兼ね備へたりとも云ふべき名畫にして靜隠道釋人物遺作中最も優秀なるものゝ一なり。

壽星圖

絹本　淡彩　縦三尺八寸　濶一尺八寸

山田直矢君藏

本圖師風の畦徑を脱して雲谷の古意を襲ふものに似たり而もその皮相を摹せずして、能く其の神意を領會して渾然自家に融化し探元の雲谷たらしむるところ秋月等に比して一頭地を抜くところあるものと謂ふ可し。

寒山拾得圖

紙本　水墨　縦三尺六寸　濶一尺四寸八分

堀　達君藏

此畫探元六十歳頃の作となす、筆墨恬淡甾致大に掬すべし、蓋し東山時代名工と匹儔して遜色なきものといふべし。

寒山拾得圖

紙本　水墨　縦二尺五寸　濶三尺八寸

阿多廣介君藏

孔子圖

絹本　着色　縦三尺五分　濶一尺三寸

久木田五介君藏

探元齋謹画

布袋雨中渡橋之圖

紙本　水墨　縱二尺八寸六分　濶一尺一寸四分

法亢昌輝君藏

布袋風雨に惱まされ、橋上に佇立して進退に窮するの奏態、寫し得て眞に精妙、墨情之を牧谿の踏に見るの感あり、

蜆子和尚圖

紙本　水墨　縦三尺七寸九分　濶一尺四寸八分

伯爵牧野伸顯君藏

此圖探元晩年の一名蹟にして、些の匠氣無く、禪理の修養によりて、淸淨の心意自ら筆端に迸りたるものなるを見る。

蜆子和尚圖

柳陰馬乘鍾馗圖

紙本　淡彩　縱四尺三寸五分　濶二尺

堀　達君藏

此畫探元七十二歳の作たることは、その自署に依つて明らかなり、洗錬老熟の域に達し毫端心血迸り、凛として秋霜の如き氣あり、構圖も亦唐玄宗皇帝夢之記に徵するものあるを見る、凡そ鍾馗を描くもの須らく之を古史に考へざるべからず、然るに往々之を究めずして漫然筆を揮り、識者の嗤笑を買ふものあるは嘆ず可きことなり。

五祖圖

紙本　淡彩　縦三尺五寸　濶一尺六寸六分

久木田五介君藏

高雅秀潤、殆んど正信に彷彿たるものあり、亦貴重すべき名品なりとす。

高砂圖

絹本　設色　縱三尺三寸五分　濶一尺六寸七分

山田直矢君藏

此畫探元八十七歲の筆たることは、其の自署に依て明らかなり、尉と姥との面貌及び其の被服の描線は、正に探元の筆たることを窺ひ知らるゝと雖、背景の松樹及び波浪に至りては、其の自作たるか否を疑はしむるものあり、案ずるに八十三歲の頃既に其の明漸衰へ、細密の物を寫す能はざりしといふに徵し、或は高門中師傳に秀でたるものをして、之を授け成さしめたるものにあらざるなきか、蓋し此の如きは諸家の常に行るところにして、只だ多少の逕庭有るのみ、敢て異とするに足らざるなり。

柿本人麿像

絹本　設色　縦二尺二寸八分　濶一尺二寸

堀　達君藏

此圖探元四十八歳の作なることは、畫面に併記するところに依て知らる、卽ち太守夫人に扈從して伊勢大廟に參拜せし歸途、明石浦人麿廟に畫拜して其の尊像を描寫し、後大原貞以なる人の請に依り、丹靑を加へて摸寫し與へたるものなり、設色の精巧、筆致の謹嚴なること、多く獲易からざる名品なり。

佐野之渡圖

絹本　着色　縱二尺五寸五分　濶一尺五寸五分

岩崎巖彥君藏

倭繪に依て描出す、其の妙味眞に掬すべし、落款を署せざりしは獻上繪に係るが故ならんか。

唐兒遊戯圖

絹本　設色　縦一尺三寸三分　潤一尺八寸二分

古川誠助君藏

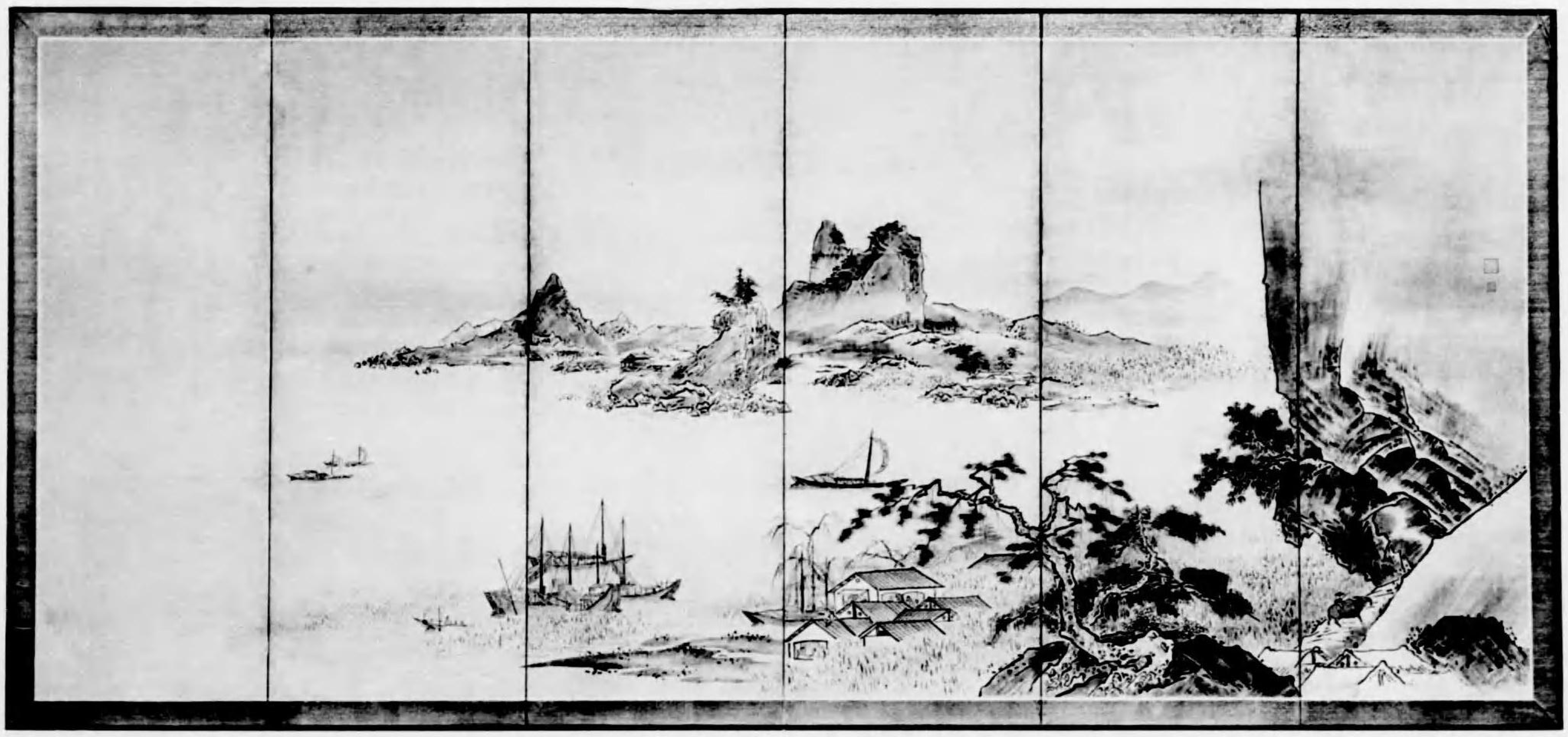
此畫探元壯年時代の作となす、純眞に狩野派を紹述して、未だ雲谷の意體を雜ふるに至らず、而も秀潤にして風韻に富む、常信と相峙して遜色なきものといふ可し。

夏冬山水圖 六曲屏風一雙

紙本 淡彩 各高五尺一寸 横長一丈一尺七寸

川上直之助君藏

探元壯時雪舟の筆に傚ふて夏冬山水を左右の屏風に寫したるものにして構圖は主として雪舟山水長卷(今毛利公爵家珍藏に係る)に採り之を重層調和して布局を作したるものとす晩年老熟して往々探幽を凌駕し雪舟の壘を摩するものは是れ此等の眞摯なる修練に因て贏ち得たるものならんか。



老松圖　六曲屏風一雙

金地　水墨　高各五尺三寸五分　全濶各一丈二尺五分

堀　達君藏

是れ亦探元大作の一遺蹟にして、墨痕淋漓、筆々萬鈞を柰く底の力を寓す、二株の老松左右に分れ、他に何物をも畫かざるは、能舞臺の鏡板に擬して、所謂相生松を描出したるものにして、藩侯邸内舞樂用に供へらるゝが爲めに、落款を署せざりしものならんか。

島津義弘公朝鮮征伐圖　六曲屏風一雙

紙本　淡彩　各高五尺四分　横長一丈一尺五寸

公爵島津忠承君藏

探元壯時齋公の命に從ひ、記錄及口碑に據り、豐太閤朝鮮征伐の時に於ける薩藩の戰歷を、部分を分ちて描寫したるものにして、各區ごとに說明の槪要を記し、且つ殊功者の傍に特に姓名を表はす、武具甲冑の如きも、其の實際を寫して後日の證左に資せりといふ、幾百の戰歷、幾千の武人仔細に展觀すれば、興益々加はつて倦くことを知らず、眞に貴重なる歷史畫なりとす。